

H・ドゥリトル著 鈴木重吉訳

『フロイトにささぐ』

一九八三年九月発行 みすず書房  
四六判 二四三頁 二、四〇〇円



フロイトについては、彼自身の短かい『自伝』のほか  
に、アーネスト・ジョーンズの『伝記』をはじめとして、  
数多くの詳伝、コメントのたぐいがある。だが、それらは  
彼の学説、学問上の交友関係を中心にして述べられている  
ものであって、正直のところ、フロイト自身のいぶきを伝  
えるものではない。それに対して、本書『フロイトにささ

ぐ』は、今世紀初頭のイマジスト女流詩人がみずから被分  
析者（つまり、患者）になって、フロイトの診療を受けた  
記録であるので、彼女の豊かな幻想や夢とともに、それに  
対するフロイトの生身の対応が、如実に示されていて興味  
深いものがある。

彼女がウィーンのプロイトの許を尋ねたのは、一九三三  
年から三四年にかけてのことであったという。周知の通  
り、フロイトは一九二〇年代から、彼の経験や思想の集大  
成の時期に入っている。学説史の伝えるところによれば、  
この時期は、いわゆる心的装置の三重構造論をはじめとし  
て、死の本能論や不安理論を提起して、文化ペシミズムの  
色彩を一段と濃くして行った時期だといわれている。しか  
し、著者ヒルダ・ドゥリトルのギリシア神話をはじめとし  
て、エジプト神話にいたるまでの神話に題材を借りた幻想  
や夢をときほぐして行くフロイトに、文化ペシミズムの色  
彩はない。これは、一体、どうしたことであろうか。おそ  
らく、フロイトの従来あつかって来た患者の幻想や夢は、  
わかりかし、類型化しやすい単純なものが多かったのであ  
ろうが、本書の著者の場合は、イメージを重視する詩人であ  
り、なおかつ、イマジストという流派のもつ独特な体質の  
ために、幻想や夢が極めて多彩であり、かつ、博引旁証で

あるために、フロイトの方がやや引きずられぎみであることにもよるのであろう。事実、著者自身、本書のなかで、これは本当の幻想ではなく、作りあげられた幻想だと、フロイトに文句を言われるのではないかとさえ、書きしるしている。

それはともあれ、著者の記録は女性であり、かつ詩人であるだけに実に細かい。フロイトの書齋やら診療室やらは、多くの写真によって周知のものになっている。それらの部屋を飾るおびただし絵画や彫像は、フロイト自身の趣味による蒐集品だけであり、単なる部屋飾りにすぎないものと思っていたのだが、これらの品々は、診療にも小道具として使われたのだという。そう言われてみれば、本書にも掲載されているフロイトの部屋と小道具の数々は、また、別様な雰囲気をもってわれわれに迫ってくるように思われる。

著者がフロイトの患者になった時期は、フロイトの最晩年にあたり、かつ、彼の身边がたちまちにあわただしくなつて来た時期でもある。この時から四年後の一九三八年、ナチスはオーストリアに侵入し、フロイト宅を家宅搜索することになる。ただちに、フロイト一家はロンドンに亡命せざるをえなくなるのであるが、本書は、迫りくる危機と

ウィーンの街頭のあわただしさをも伝えてくれていて、興味がつきない。

著者の幻想や夢について、逐一、詳しい訳註がつけてあり、本書は、初学者にも大変読みやすいものになっている。ただ数ヶ所出てくる「空飛ぶオランダ人」という患者のくだりはどうなのであろうか。原文を見ていないので何とも言えないが、もし、ドイツ語で“Der fliegende Holländer”にあたる英語なら、「さまよえるオランダ人」(ワグナーの楽劇)の方がよくはないだろうか。ドイツ語の方も文字通りなら「空飛ぶオランダ人」である。鈴木教授にご教示いただければと思う。

(清水多吉)